
ハエたたきで死す

連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

八工たたきで死す

【Nコード】

N6872R

【作者名】

連

【あらすじ】

あなたは八工たたきに命をかけたことがあるか？ たった一匹の八工を追いかけて、彼女は死んだ。ここに八工たたきで命を落とした人の物語をお届けする。

ここにひとりの主婦がいる。その主婦の命は尽きてしまった。主婦はハエを追っていた。たった一匹のハエを。そして体力が尽き、死んでしまった。主婦は伝説となった。

「ハエたたきで過労死した女」と。

ここにその哀れな、まぬけな主婦の一日を記録に残すしよう。

始まりは朝、主婦が洗濯物を取り込んでいる時であった。天気も良く、昨日今さらながらにハマったYON様のDVDを見てご機嫌であった。

「じゃ、いつてきまーす」

旦那の声が玄関から聞こえた。続いて中学生の息子と娘のドタバタした足音も続いた。

主婦は洗濯物を取り込んでいたのだから当然、窓は開けている。最後のシャツを部屋に入れた時、主婦の視線の横を一匹のハエが横切っていた。

「あ、ハエ……」

これが不幸の始まりだった。

「開けていたら出て行くかしら？」

取り込み、そして干し終わった主婦は室内に入り窓を開けていた。蜂は室内の電気を消して、窓を開けていれば自然と明るいほうに逃げていく。

主婦はその知恵にのっとり、同じようにガラス戸を開け、五分も待てばいいだろうと気楽に考えていた。

しかし。

ぶ〜んぶ〜ん。

部屋の壁から壁へ細かな移動を続ける一匹のハエ。主婦はイライ

ラし始めた。

「なんで出て行かないのよ」

主婦は二階の部屋から一旦、台所へ降りていった。

主婦が持ってきたのは、普段台所の隅に置いてあるハ工たたきであつた。水色のハ工たたきで、その穏やかな色はおよそ生命体を殺生するような激しいイメージは持ち合わせていない。むしろ、「台所にそつと置いといてくださいよ」とでも言っているような雰囲気をする代物である。

それを右手に持つ。そして急な階段を一步一步ゆつくりと踏みしめていった。

主婦は期待した。

ハ工はもういないのではないか。

「なあんだ、出て行つたの。つまらない」

などというセリフを用意していたのだ。しかし。

二階の部屋は自室である。この家唯一の和室だ。その襖をそつと横にずらす。

ぶ~~~~ん。

「いた……」

相変わらずの移動。時々、電気のところへ留まる。そしてまた壁に張り付く。と、思えばタンスへ。

主婦はにじり寄つた。今、敵が駐屯している薄緑色の壁へと。スナイパーがライフルを構えるかのごとく、主婦はハ工たたきを振り上げた。そして。

「えいやー」

ぶ~~~~ん……。

残念ながら敵に逃げられてしまったのである。それも仕方がない。気合が全くなかった。

「しくじったか」

主婦は残念がったが、それほどでもなかった。三発も振り下ろせばなんとかなると思ったのだ。しかしそれは甘かった。

ぶ〜ん。

今度はタンスに移動した。

「よし、次こそ」

振り上げた瞬間であつた。

ぶーん！！

「ぎゃあ！！」

敵は主婦の体めがけて飛んできた。奇襲である。まさかであつた。
「気持ち悪い！気持ち悪い！ゲー！！」

敵はそこからは何にも留まらずに空中を移動し続けた。まるで主婦をあざ笑っているかのようである。

主婦の瞳の奥が一瞬ギラリと光った。ここに「主婦VS蠅」の完全なる図式が出来上がったのである。

余談ではあるが、この主婦は気が強い。気が強いというよりも「カツ」となる性格である。

ついこの間、旦那がこづかいを上げてくれと言った。わりと控えめに申し出た。しかし主婦は断った。

「一万円で足りるでしょ？なにか文句でも？」

旦那は当然のごとく食らいついた。

「一万円じゃ足りないよ！！」

その時、いつものように主婦は怒鳴った。

「じゃあ五千円で我慢しろー！！」

旦那のこづかいは五千円に格下げされた。こういう性格なのである。

ハエである。今、目の前にはハエが、もうこの主婦の目にはハエしか映っていなかった。素振りをする。ハエたたきの素振りである。上から下に振り下ろす。もしくはテニスのように後ろから前へと。

「殺してやる……!!」

主婦の心は殺人鬼と化しつつあった。いや、「殺人鬼」ではないか。なんというか「殺蠅」というか、まあそんなところである。

ブンブン。

今度は主婦のハエたたきが唸った。これが当たれば死は確実。敵はたかがハエ一匹。

「うおおおお〜〜〜」

主婦は唸り声を上げた。そして敵がピタリと留まった壁に突進して行った。

「死ねえ〜〜〜!!」

バチーン!!

やったか!? かし!!

「ぎゃああ〜〜〜!!」

ハエにあるまじき行為であった。敵は主婦の顔に留まった。なんと夕刊な敵であるうか。いや間違えた。勇敢である。いや、夕刊に載せてやってもいい。

主婦は手で顔を払いまくった。その拍子に開け放った襖から、ぶんと逃亡させてしまったのである。

「しまった!!」

気づいた時には遅かった。閉めておくべきだった。敵は階段を下りていった。

リビングか、台所か、はたまた旦那の部屋か?

主婦は一通り順番に探した。すると「こちらこちら」をするかのように敵は台所へ侵入して踊るように舞っていた。

台所にはテーブルの上に果物が置いてある。ほかに昨日の残り物もある。主婦の心はざわめいた。そしてその予感的中するかのごとく、敵は息子たちの弁当の残り、卵焼きへと着陸した。

「おおおお〜〜〜!!」

主婦、突進。我を忘れて突進。

「死ねやーーーー！！」

武器を振り下ろした。卵焼きなんかかわらず振り下ろした。ハエ、逃げる。卵焼き、潰れる。

今度は水道に留まった。

「きええええーーーー！！」

バチーン！！

またも、ハエ逃げる。蛇口が押さえられて、水出る。

ジャーーーーー！！

鍋に留まる。鍋、叩く。鍋、落ちる！！

ガラガラガラガラーーーー！！ドシャーーン、ガラーーン、ガラガラーーン！！

もう、何がなんだかの有様であつた。これはもはや、スポーツである。「ハエたたき」というれっきとしたスポーツだ。

汗にまみれた主婦。逃げ続けるハエ。もしくは恋愛とも言える。

主婦はハエが愛しくて愛しくてたまらない。だから追いかける。

しかしハエにその気はない。だから逃げる。

そう、これは「映画」なのだ。1800円取れる壮大なラブストーリーなのだ。このC級恋愛は夕方まで続いた。主婦は追いかけたかの人を追いかけた。でも捕まらなかった。主婦の心は駄目になりそうだった。それでも追いかけた。

ヘトヘトになった夕暮れ時、主婦は最後の気力を振り絞った。これでやめよう。この一振りで捉えられなければ終わりにしよう。そしてとりあえず寝たい。ぐっすり寝たい。この主婦の願いはそれだけであつた。

場所はまた二階。和室である。主婦はぶら下がり健康器に留まった敵を見つめていた。

「そう、これで終わり……、これで……」

しかし敵はこの主婦に過酷な運命をもたらす。

敵は健康器をゆっくりと離れた。そして、ある写真立てにびたり

と張り付いた。

「あ……！！」

その写真には主婦が今、熱を入れていたヨン様が写っていた。な
んともいえない素敵な笑顔だった。

「ヨヨヨヨヨン様……」

主婦は混乱した。まさかヨン様は叩けまい。そう敵が言っている
ようであった。ベランダへ続く窓は開きっぱなしである。軽く払え
ばそこへ移動させられない距離ではない。

主婦の心は揺らいだ。

そつと逃がしてやったらどうか。

ヨン様をじつと見つめる。敵はその写真の上に留まっている。

愛とは。

愛とは何か。

それについて考えたことはないだろうか。

愛。それは海よりも深く、解き放てばどんな遠いところまでも飛
んでいきそうな感情。主婦はベランダから空を見上げた。そこには
真つ青な青空があった。

愛。それは人々の思考など届かない壮大なものであるのかもしれ
ない。

パタン。

主婦は窓を閉めた。そして襖も閉めた。主婦は愛の行く先を決め
た。

写真の前に立つ。ゆっくりと振り上げられたハエたたき。主婦は
裂けんばかりの大声で叫んだ。

「死ねえー！ー、ペ・ヨンジュン！ー！ー！！！」

バチー！ー！！

そこから先の記憶がこの主婦にはなかった。

「で？なんだって？私が『ハエたたきで過労死した女』って、噂で広がってるんだって？」

主婦はぐつぐつと味噌汁を炊いている。

「お母さん、味噌汁って沸騰させたら駄目なんだよ」

飴をなめていた中学生の娘が椅子に反対向きに座りながら言った。

「こら！ごはんの前でしょ！」

「はい」

娘は反省の色はなかったが、口から飴を出してティッシュにくるんで捨てた。

「だいたいあんたが悪いのよ、『死んだ』なんて言いふらすから」

娘は矛先を同じく中学生の息子に向ける。息子は冷や汗を流しながら苦笑いをした。

「いやあ、ごめんごめん。だって友達が信じるって思ってたからさ。それに実際に救急車呼んだじゃん。うつ伏せにぶっ倒れてたんだから」

「まあね……」

主婦は力チリと味噌汁の火を消した。

「ま、あんたたちのおかげだったわよ。あれ以上時間が経ってたら私の命も尽きていたかもしれないわ」

「じゃ、あながち過労死も間違ってるんじゃないじゃん」

「間違ってるのー！」

主婦は息子を一喝した。

「でも結局、どうなったか分からないんだよね、あのハエ……」

娘は名残惜しそうにゴミ箱を見つめる。

「死体はなかったんだろ？」

「死体っていう言い方はどうかな」

息子の言葉に娘はすばやく突っ込む。

「まあでも大変な一日だったわね。でももったいいわ。お父さんもすぐ帰ってくるから晩ごはんにしましょ。さ、運んで」

「はい」

カチャカチャと食器を並べる音。ごはんをよそう湯気。ちょうどそこに旦那が帰ってきた。

「ぴったりね」

旦那はすぐに笑顔になった。

「お、うまそうだな」

主婦は得意げに言った。

「今日はステーキよ。百グラムいくらだと思う？高かったんだから着替えた旦那を待って、全員が席に着いた。

「いただきまーす」

「いただき……あ、母さん……」

「何？」

息子は空中を指差した。全員が口を揃えた。

「ハエ……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6872r/>

八エたたきで死す

2011年3月17日14時40分発行